第 292 号　　生徒さん・ご家庭・先生をむすぶ新聞

とらいあんぐる

2014 年 5 月

一音会ミュージックスクール発行

「苦手なこと」

どんな人にも、苦手なことはあると思います。その苦手は、人によって大きく違うでしょう。

私にも、もちろん苦手があります。それもたくさん、あります。

その中で１つ、苦手の度合いを人に自慢できるほどに、苦手なことがあります。

それは、運動です。

私の運動のできなさ加減は、普通ではありませんでした。

何をやっても、私よりもできない人を、これまで見たことがありません。

小中学校時代、スポーツテストの全種目で、学年最下位、でした。

学年より広げて比べる機会がなかっただけで、できなさ加減を競う大会があったら、きっと「全国大会レベル」、「日本代表クラス」であったと自負しています。

小学校時代にたたきだした、最遅記録、５０メートル１４秒は、おそらく誰にも破られていないと思います。

スイミングスクールには、まる２年、通いましたが、２年間もの間、休まず通っても、バタ足で５メートル泳ぐのがせいいっぱいでした。２年通ったある日、「もうダメかもしれない・・・」と、先生が思わず本音をつぶやいたのがきこえてしまい、ショックでやめてしまいました。

体操教室にも通いました。

が、１か月で断念しました。高所恐怖症で、どうしても平均台に乗れなかったためです。

運動会についても、いろいろなエピソードがあります。たとえば、１００メートルのかけっこです。

かけっこは、５人ぐらいずつ、一度に走って競争をするわけですが、時間の短縮のため、全員がゴールするのを待たずに、次のレースの走者をスタートさせます。

そうすると私は、あまりにも遅いために、次のレースの人たちに追いつかれそうになってしまうのです。

一度などは、次のレースのトップと勘違いされて、ゴールテープを切ってしまったこともありました。

なわとびも、とび箱も、鉄棒も、・・・人並みにできることがありませんでした。たいへんなコンプレックスでした。

私は決して、努力していなかったわけではありません。

自分なりに、体操をしたり、走ったり、家でトレーニングをし、体育の時間は、みんなに笑われても、なりふりかまわず必死で取り組みました。

放課後、残って、お友達に教えてもらったことも、しょっちゅうでした。

小さい頃、母によく相談しました。

私の悩みに対して、母は一貫して、のん気そうでした。

私が、できないことを、母にうったえると、決まって母は

「いいじゃないの、できなくて」

といいました。

母は決して「がんばれ」とはいわないのです。「がんばれば、できる」ともいいません。

私は、くいさがります。

「よくないもん！」

私は、「がんばれば、あなたもできるわ！」という言葉を期待していたのかもしれません。

やってもやっても、できるようにならず、「もう私はダメだ・・・」と、劣等感にさいなまれていた私は、母から「ダメじゃないわ」という言葉をもらいたかったのかもしれません。

やさしく励ましてもらいたかったのかもしれません。

しかし、私の母は、普通の母親がいうようなことを、いってくれる人ではありませんでした。

「いいじゃないの、できなくて」

いつも、それです。

また、こうもいいます。

「運動なんかできなくたって、死なない」

まったく親身になってくれません。

また、のん気そうな口調は、私をイラつかせます。

あれは、小学校低学年くらいのことでしたが、腹が立って、母にくってかかったことがあります。

私がききたいセリフをいってくれない母に焦れて、怒りました。

母は、私が何といってほしいか、分かっているに決まっているのです。だからよけい、腹が立ちます。

その日も、母はのらりくらり、受け答えをしていました。

私はついに大声を出します。

「普通のお母さんは、そんなこといわないよ！」

「いいんだもん。普通じゃなくて」

母は、まったくこたえていません。いつものように、へらへらしています。

当時、少し、口が達者だった私は、さらに母を追及します。

「ママは、教育者でしょ！　教育者は、そういう時、『がんばれば、できるわ！』って、いわなくちゃいけないんじゃないの？！」

「・・・」

母は少し、真顔になります。

「がんばれば、できる？　アッちゃんは、本当にそう思ってるの？　ママがそういったら、『あ、そうなのか』って、思えるの？」

私は、急に分からなくなりました。

がんばればできると、自分で本当に思っていたら、母にうったえることなく、ただがんばれば良いだけのことです。

私は、なぜ母にうったえているのでしょう？

そもそも私は、母に「がんばればできる」といってもらえれば、がんばれるのでしょうか？

母は、私の心を読み取ったかのようなことをいいました。

「ママが『アッちゃんは、がんばればかならずできるわ！』って、いってあげたら、アッちゃんは、それで良いの？　それで楽になるの？」

私は混乱します。私が望むセリフを母がいったところで、何かが変わるのでしょうか？

かぶせるように、母がいいます。

「そんなことで、楽になるなら、いくらでもいってあげるわ！」

思いがけず強い口調でいい放つ母に、

私は泣き出しました。

次に母は、こういいました。

「アッちゃん、ママはね、『がんばればできる』なんて、絶対いわないわ。だって、ママはそう思っていないから。思ってもいないことを、アッちゃんにいえないわ」

見上げると、母の顔は苦しそうにゆがんでいました。

「がんばれば、何でもできるなんてこと、ないのよ。そういうのを、気休めっていうのよ」

「気休め？」

「そう。き・や・す・め」

「がんばっても、できない？」

「あたりまえでしょう？」

あきれるほどに、現実主義者です。とても小さな子どもにいうセリフではありません。

しかし、「がんばってもできない」という宣告をきいても、その時、私はショックではありませんでした。

私も、実はそうなんじゃないかと、思っていたのです。

迷いのない母は、さらにすごい宣言をします。

「アッちゃんが、がんばりたいなら、がんばったらいいわ。ママは、もちろん応援するわ。でもね、がんばるのがつらいなら、がんばらなくていいのよ。」

「えっ？　がんばらなくていいの？」

学校で「がんばれ教育」を受けていた私にとって、それは衝撃的な言葉でした。

母は、確認するように、続けました。

「いい？　よくきいてね。ここだけの話だけど、実はがんばらなくていいのよ」

「本当にがんばらなくていいの？」

「うん、がんばるのがつらいっていうことは、それはアッちゃんにとって、がんばるべきことではないのだと思うわ。がんばるのが楽しかったら、アッちゃんはママにきいたりしないで、一人でがんばれるでしょう？」

その通りでした。私は、すでに十分にがんばっていました。

そして、母の励ましがなければ、努力を続けられないほどに、追いつめられていました。いえ、励ましがあっても、無理だったかもしれません。

母はにっこり笑って、いいました。

「運動ができたって、できなくたって、アッちゃんはアッちゃんでしょ

う？　いいじゃないの、できなくて」

　またいつものセリフです。

　「ママから見ると、アッちゃんには、得意なことがたくさんあるわ。アッちゃんは、絵が上手だわ。本を読むのが上手だわ。おもしろいお話を作るのも上手だわ。あのね、時間はたくさんあるようでいて、実はそうじゃないのよ。同じ時間を使うなら、得意なことをがんばるべきだわ。得意なこと、好きなことだったら、楽しくがんばれるでしょう？」

　「うん！！」

　私は、すっかり解放されました。

　この日を境に、私は運動にかけていた努力を、すっぱりやめました。

　皮肉なことに、努力をやめたことで、さらにできなくなった、ということもありませんでした。がんばろうががんばらなかろうが、できないことに変わりはありませんでした。

　まさに無駄な努力だったのかもしれません。

　合理主義者でもある母は、苦手を人並みに近づける努力より、得意をさらに伸ばす努力をうながす人でした。

　おとなになってみると、得意なことに助けられたことは数多くありましたが、運動ができないことで大きく損をしたことはありませんでした。そんなものなのかもしれません。

　今、私自身は、苦手の多いでこぼこな子ども達を育てていますが、でこぼこがさらにでこぼこになったってかまわない、苦手を克服できなくたってかまわない、と思っています。

　実際、苦手なことをがんばるのは、つらいばかりで実りが少なく、とうとう私は、苦手を人並みに近づけることが、できずじまいだったのですから。

　子ども達には、得意なことがさらに得意になってくれることを望んでいます。

　気がつけば、母のあのセリフを、今は私が口にしています。

　「いいじゃないの、できなくて」

（江口　彩子）

◆「第９回ジュニア・コンサート」が開かれました

４月２８日（月）に、「第９回ジュニア・コンサート」を開きました。足をお運びくださり、あたたかな拍手をおくってくださった方々、どうもありがとうございました。

去る３月２１日のオーディションをくぐりぬけた生徒さんの発表の場でしたが、過去もっとも難しい基準となったオーディションだけあって、どの演奏も素晴らしいものでした。

このオーディションは、小学校３年生以上の一音会の生徒さんなら、どなたでも挑戦できます。高い壁ではありますが、決して遠い目標ではありません。

何回も挑戦を重ねる中で、成長を遂げ、出演をつかみとっていく生徒さんが、多くいらっしゃいます。

来年の「ジュニコン・オーディション」は、2015 年３月２２日（日）を予定しています。まずは、オーディションに挑戦することから、はじめてください。ほとんどの生徒さんが、不合格経験からスタートしています。オーディションに足を運んだことがある方はご存知かと思いますが、非常にレベルの高いオーディションです。不合格は、恥ずかしく思うことではありません。まずは挑戦です。挑戦する中で、磨かれていきます。

来年の３月にまた、一人でも多くの挑戦者に会えることを願っています。

◆教室の先生たちのコンサートがあります

６月１日（日）に、「おんがくかい」を開かれます。場所は、「ひびきホール」です。

「おんがくかい」は、教室のスタッフによるコンサートです。歌にピアノにヴァイオリンにフルート、もりだくさんのプログラムです。曲も、親しみやすい曲を集めましたので、小さな生徒さんからおとなの方まで、皆さま、楽しめることでしょう。

出演予定の先生

北村 真紀子 先生（ヴァイオリン）　渡邊 麻里 先生（フルート）

井上 麻子 先生（ピアノ）　垣内 理恵子 先生（ピアノ）

鈴木 亜季 先生（ピアノ）　加藤 裕子 先生　（歌とおはなし）

日　時

6 月 1 日（日）

1 回目　11:00 開演（10:30 開場）　2 回目　14:00 開演（13:30 開場）

チケット

小学生 500 円（未就学児無料）、中学生以上の大人 1000 円

ショパンはうす受付にて　販売中

◆節電にご協力ください

汗ばむ季節がやってきました。

防音の関係で気密性の高い教室は、学校よりも、電車の中よりも、どこよりも暑くなりがちです。特に生徒さんのエネルギーあふれる、グループレッスンのお部屋は暑いです。

すでに教室では、エアコンを使っていますが、生徒さんには薄着になれる服装でいらっしゃるよう、お願いしたいと思います。涼しいと思える日でも、上を脱げばＴシャツ１枚くらいが、ちょうど良いです。

◆不審者を見かけたら、お知らせください

教室近隣で、不審者情報があります。

教室でも、十分に目を光らせていますが、貴重品をお手元からはなさないよう、小さなお子さまから目をはなさないよう、ご家族の皆さまにも、十分に気をつけていただきたいと思います。

また、教室の中で不審な人物を見かけましたら、すぐに「ショパンはうす」受付にお知らせください。「ショパンはうす」以外の教室で見かけた場合にも、お手数ですが「ショパンはうす」受付（０３－５９６６－９１１１）にお知らせください。スタッフがすぐに参ります。ご協力をよろしくお願いいたします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

スクールの生徒さんのご質問を、以下の２つの方法で受け付けています。

メール：1000@ichionkai.co.jp　　電　話：03-3954-9999

＊　お電話での質問時間は、毎週水曜日の午後７時半～９時半です。ただしレッスンがお休みの日は、質問もお休みとさせていただきます。

＊　ご質問は、多くの方のご質問にお答えするために、お１人 10 分を目安とさせていただいています。ご了承ください。